



東アジアの都城遺跡

著者	高橋 誠一
雑誌名	人文地理
巻	42
号	5
ページ	52-75
発行年	1990-10
その他のタイトル	東亞的都城遺跡
URL	http://hdl.handle.net/10112/4317

東アジアの都城遺跡

高橋 誠 一

- | | |
|-------------------|-------------------|
| I はじめに一都城の風景 | (2) 南北と東西 |
| II 文献資料と基礎的データの作成 | V 都城の整形度 |
| (1) 使用した基礎的文献資料 | (1) 都城の整形度と宮城の整形度 |
| (2) 基礎的データの作成 | (2) 都城の整形度と規模・方位 |
| III 都城の規模 | VI 都城の形態 |
| (1) 都城全体の面積とランク | (1) 都城の形態と規模 |
| (2) 都城の面積と宮城の面積 | (2) 時代別・地域別の都城の形態 |
| IV 都城の方位 | VII まとめ |
| (1) 都城の規模と方位 | |

キーワード：東アジア，都城遺跡，都城面積，都城形態，都城方位

I はじめに——都城の風景

東アジアの古代の都城に関する研究は多い。なかでも、各地域の都城を個別的に扱った研究はもちろんのこととして、東アジアの都城を系譜的に考察した研究の多いことが注目される。¹⁾ 筆者も、日本の古代都市について、城壁の有無、周濠の有無、中国式羅城や古代朝鮮式山城、あるいは四神の思想などを、主たる鍵として検討を重ねてきた。²⁾ しかし、既往の研究や報告書によるかぎり、東アジアの都城やそれをめぐる様々な事象をどうしても実感的に理解できないということに思いいたった。そこで、この十年来、各地の都城遺跡を巡る小さな旅を繰り返すこととなった。旅の折々の印象は、あくまでも、きわめて主観的な直感ではある。しかし、少なくとも筆者にとっては、拭いがたい心象となっている。したがって、まず断片的な文章を連ねることから始めたい。

〈石と山城—新羅と百済〉 慶州には、日本でも見慣れたような、しかしそれでいてどこか異なるようなイメージを抱く。天馬塚も半月城の土石塁と周濠と石氷庫も、日本のものとの類似点は確かにあるが、違和感を完全に拭い去ることができない。これに対して、仏国寺の石段と有影塔・無影塔の組木細工のような精巧さは日本のどこにも見られない。おそらく地震の少なさと木材の希少さがその背後に潜んでいるのであろうが、新羅はまさに石の文化である。

白馬江が予想したよりもはるかに大河であったためか、扶余の都城は、かなり広々とした感じをうける。公州の都城は扶余に比べるとより閉塞された印象を与えるが、山城と羅城のセットという関係は、同様にきわめて強い印象を残した。ただし、扶蘇山城も公山城も、ともに比較的低い山城であり、純粹の軍事施設というより宮殿地区としてのウェイトが高いことが感じられる。武寧王陵周辺古墳は、慶州天馬塚と

1) たとえば、地理学分野に限ってみても、藤岡謙二郎『都市文明の源流と系譜』、鹿島出版会、1969、141—181頁、矢守一彦『都市プランの研究』、大明堂、1970、216—244頁など牧学に暇がない。

2) 拙稿「古代の都市と城壁」、京都大学地理学教室編『地理の思想』所収、地人書房、1982、145—155頁など。

は明らかに異なり、百済と新羅の文化の違いが痛いほどにわかる。定林寺跡の平済塔もまた、石の文化圏域にあることを語るが、新羅のものよりはるかに柔かい感じで、百済から渡来した鬼室集斯に繋がる滋賀県蒲生郡の石塔寺の石塔との共通性を持っている。

水原における市街地と東西の山を取りこんだ李朝時代の壮大な城壁と八達門・長安門は、日本には類のないものである。山城と都市を囲む羅城は、扶余や公州のように、かつてはほとんど独立したものであったが、いつの時期かに統合された可能性が強い。

ソウル南郊外の南漢山城は、百済以降李朝にまで続いた大規模な山城である。山の中心部が盆地上の凹地になっており、それを取り巻く稜線に城壁が続いている。したがって城内には水田も川もある。この山城に比べれば、日本の古代朝鮮式山城の多くは、単に山の頂上付近を石垣や土塁で針巻き状に囲んだにすぎないと言っても言い過ぎではない。そして、眼の前に広がるかつては城壁に取り囲まれていたソウルの都市と漢江、その北に聳える北漢山城。百済と新羅は、石と山城の地である。³⁾

〈江南の壁と水〉 杭州には、城壁は現存しない。慶春門などの城門も今はない。しかし濠は生きている。また南部の呉山には、石垣が残っている。時期は定かではないが、3時期くらいに分けられそうで、宮殿に接する地であることを考えると、あるいは山城であったのかもしれない。

蘇州には、宋代の平江図に描かれた城壁の一部が残る。また明清代に修復されているものの、原型はより以前に遡る盤門、これは石材と磚を豊富に使用したもので外濠とセットになって、きわめて堅固なものになっている。白壁と黒灰色の薄い瓦の屋根、屋根には瓦流草がはえ、そ

の下を水路が縦横に通る。

揚州には、唐、宋、元、明、清代の城壁が断片的に残っている。とりわけ北部の小高い地にある唐代のそれは、版築の重厚なものである。瘦西湖のほとりを歩いている時、その水のありようと百日紅などのせいであろうか、ふと奈良の猿沢池や鷺池のほとりを歩いているような錯覚におちいった。

南京の城壁と城門、なかでも中華門の壮さには、彼我の都城プランの決定的な差を痛感させられる。使用されている磚は、5省125県から集められたという。さらに紅色砂礫岩を削り一部にはその上に磚を張り付けた石頭城、明故宮遺蹟、台城遺蹟、そして玄武湖公園から見る明代の城壁。

江南の各都城で見た城壁や城門と、それを取り囲んでいる河川と周濠は、いずれも豊かで完全なるものである。たしかに「水」で囲むという点からすれば、日本の古代都市は、江南の影響をより強く受けている、とってよいであろう。湿潤な風土と灌漑を不可欠とする水田農耕などの共通項を考えれば、両者の共通性は当然の帰結ではある。しかし、江南の都城を囲むものは、豊富な「水」と重厚な「壁」の両者である。日本の場合は、ごく一部の影の薄い「壁」しか存在しなかったし、「水」にしてもはるかに小規模の川で都市の一部を画するものでしかなかった。⁴⁾

〈土の文化—山東と山西〉 北京から済南へ向かう列車の中で、痛切に感じたことがある。それは北京から黄河を渡るころまでの8時間の間、山を見なかったということである。日本で8時間もの列車の旅の間、山を見ないということは、まず考えられない。

このことは、山に対する信仰や憧憬の密度や濃淡、山の見える都城と見えない都城、都市計

3) 拙稿「東アジアの古代都市」、『地理』25—9, 1980, 56—63頁。

4) 拙稿「京杭大運河と長江」、岸俊男編『中国江南の都城遺跡』所収、同朋舎、1985, 50—54頁。

画の際の基準としての山の有無，山から出てくる河川の規模の相違，水に関する発想の相違，大地についての概念の差，などに大きな影響を及ぼしてきたことが予想できる。このあたりにも，中国と日本の都城の違いを解く鍵が潜んでいるようにも思える。⁵⁾

それはともかく，山東も山西も，やはり重厚な城壁の世界である。山東の齊都臨淄や魯国故城曲阜はもとより淄博市の蒲松齡の生地の蒲家村のような小さな集落でさえ城壁によって囲まれている。山西の太原城も晋陽故城も，そして大同城も，かつては大規模な城壁を有していたし，平遙城には，現在もなお正方形に近い壮麗な城壁が保存されているのである。しかも，それらは全て分厚い土の壁である。何重にも築き固められた版築の壁に，煉瓦や磚が張りつけられている。城壁だけではない。一般の住居も，そのほとんどが土壁なのである。五台山から大同へ向かう途中に見た穴居住居も，応県の土塗りの家も，大都会における近代的なビルさえもが多くは煉瓦を張りつけられている。まさしく土の文化であるといつてよい。⁶⁾

このように中国の土木工事の主体が，土を掘り，塗り固め，積み上げ，焼き固めることである以上，土の城壁で都市を囲むという発想は，いわば必然的なことであった。要するに，城はあくまでも「城」であり，「碱」でも「械」でもありえなかった。城壁・都市壁は，もちろん外敵に対する防衛の目的を第一義的に持っていたにちがいない。しかし，それと同時に，人民を囲い込んで都市を成立させ，なかば強制的に広義の戦闘要員に組み入れるためのものでもあ

ったのではないか。さらにまた，砂埃や土埃を防止する防砂壁としての目的をも有していたと考えられる。とすれば，都市を囲む壁は，さまざまな脅威の渦巻いている城壁外から城内を明確に切り分けるためのものであった。それゆえ，いやしくも都市・都邑たるものにとって，城壁は不可欠なものとして意識されたにちがいない。

もっと言えば，土が一般的なものである反面，木の少ない風土の中にあつては，木造建築は特別のものであった。宮殿や寺の木造建築は，権威の象徴であり憧れの対象であった。木造であることが特別の意味を持たない日本とは，この点が，おおいに異なっている。

それにしても華北の平原には，水が少ない。黄河はあるが，それ自体は途方もなく大きく，それ以外においては水が乏しい。江南の都城と比較する時，壁と水との比重の差は歴然たるものである。⁷⁾「南船北馬」という言葉は，単に交通手段の差のみを表現したのではなく，きわめて多面的な意味を持っていると考えねばならない。⁸⁾

<ふたたび石と山城—高句麗> 長春を出てから5時間あまり，東遼河流域を走る車窓の景観が，中国東北地方の大平原とは著しく変わり始めた。山のふところに抱かれた景観は，日本でもよく見かける風景である。包米楼と呼ばれる木の倉庫も点在している。江南や山東・山西では，特殊な建造物にしか見なかった木材が一般の農家にも使用されているのである。そして通化。長春の料理が塩辛かったのに対して，唐辛子の味が顕著になっている。翌日の車窓には，頭の上に荷物を乗せて運ぶ農婦の姿，朝鮮人参

5) 『人文地理』42-1, 1990所収の「1989年度大会特別発表 報告・討論の要旨および座長の所見」において，河野通博氏から非常に有益な所見をいただいた(注6・7・10)。古代文明の中心地であった地域では必ずしも山が稀薄であったとは言えないし，絵画の世界で伝統的に深山幽谷が描かれてきたのは山が稀有の存在であったからとも言えないとされる。前段に関しては，それでも日本と比べた場合の山の稀薄さを筆者としてはどうしても強調したい。しかし，後段に関してはご指摘の通りであり大会レジュメの該当部分を撤回しておきたい。

6) たしかに磚(磚)は石の代用としての役割を果たしていた。しかし，磚(磚)はあくまでも土を原料とするものであり石ではない。筆者としては原材料の違いにこだわりたい。

7) 中国北部でも周濠は存在する。しかし，その密度と規模は江南などの比ではないことも事実である。

8) 拙稿「山東と山西の風土」，岸俊男編『中国山東・山西の都城遺跡』所収，同朋舎，1987，101—105頁。

の畑。いよいよ朝鮮に近づいている。

高句麗の故地である集安で見た遺跡は、文字通り石の遺跡であった。將軍塚、好太王碑、五箇墳五号墓の四神の壁画、舞踊塚、洞溝古墓群、古代採石場。なによりも、国内城の見事な石の城壁と、平地を中に取り込んだ山の稜線上に連なる丸都山城の城壁。

この丸都山城ときわめて類似したプランを有するのが、平壤の大城山城である。百済や新羅の山城とはかなりの隔りを持っていると考えられる⁹⁾。いずれにせよ、大城山城や平壤城（長安城）の城壁、徳興里古墳・江西三墓の石室や東明王陵の石積、開城の恭愍王陵の石積や満月台の礎石。これらは高句麗の地も、石の文化であることを明瞭に物語っている。筆者の新羅に始まった旅は、高句麗の地でふたたび石と山城に巡りあったことになる¹⁰⁾。

以上の、東アジアの一部を巡る旅の結果、中国における省は、我々の感覚からすれば、国であると言ってよいのではないかと感じざるを得ない。省が変われば人の風貌も景観も料理も、全てががらりと変わることをしばしば経験した。省の面積や人口は、数字のオーダーからすれば、日本全体のそれとほぼ同じか、せいぜい数分の一である。もろもろの可視的・不可視的なものに、省という地域レベルの持つ有意性が感じとれる。古代の日本や朝鮮などは、中国のせいぜい2ないし3省に相当する一地方でしかなかったと思う。

以上のことはあくまでも単なる印象でしかない。筆者の脳裏には、あまりにも色濃く焼き付いてしまった印象ではあるが、これだけでは、単なる感想文でしかなく、客観性に欠けること

は否定できない。そこで、以下、都城の規模や形態を主軸として、東アジアの都城についての検討結果を述べたい。

なお検討に際しては、中国の比較的新しい都城や小規模の都市をも対象とした。日本ばかりでなく東アジアの都城を考える際、従来はどうしても唐代以前の比較的大規模な都城についてのみ考察されることが多かった。しかし、都城の理想型である周礼型都市の完成時期や地方の都市にも周礼型都市が認められるという事実を考慮に入れれば、より新しい都城や、都城の名にはそぐわないよりローカルな都市をも、視野の中に含めなければならないと考えたからである¹¹⁾。また、検討の過程では、できるかぎり日本の都城を主軸にすえることを避けるように努めた。これは、古代の日本は、あくまでも東アジアの一地方でしかないとの、先の印象が、筆者の頭に強く残っているからである。

II 文献資料と基礎的データの作成

(1) 使用した基礎的文献資料 東アジアの都城について、従来考察の柱をなしてきたのは、都城内部のプラン、すなわち都城の方格プランの実態、道路形態やその名称、条坊区画や城門の名称などである。しかし、本稿では、既にくたびも扱われてきたこれらに拠ることはしない。なぜなら、これらの情報は、都城ごとに相当の偏りがあるからである。また現在まで俎上にあげられてきた材料だけでは、すでに限界に達しかけているといっても大過がないからである。

そこで、できるだけどの都城についても容易に得られ、かつ客観的な比較が可能なデータを

9) この点に関して、筆者は、中国式羅城の導入時期の違いが大きな意味を持っているのではないかと予想している。いずれあらためて論じたい。

10) 中国にも石壁の山城は存在する。古代朝鮮や日本の山城とはそのありようが違うと考えているが、今後比較検討したい。

11) 本稿のタイトルにも使用した「都城」という用語は、必ずしも厳密な定義を経たものではない。本稿で扱った遺跡には、一般的に言われる都城遺跡以外に、都城の名には到底値しないような集落遺跡も含んでいることは事実である。しかし表現上の繁雑さを避けるため一括して「都城遺跡」という用語を便宜上使用することとした。

第1表 都城の規模と形態

都 城 名 ・ 時 代	全体の面積	外()内は全城壁	整形度	全 体 の 形 態	長 辺 N S か E W か	長辺長		方位	宮 城 の 位 置	宮城面積
						短辺長	短辺長			
B C 秦 都 咸 陽	170.45	51.90	251.6	正方形	同じ	1	0			
F 唐 長 安 城	89.02	42.80	220.4	長方形とその他	N S	1.25	0	中央北接		14.93
D E 漢 魏 洛 陽 城	65.88	36.41(38.23)	222.9	長方形の南に長方形	E W	1.02	5	中央やや北寄り		5.57
J 清 代 北 京 城	59.26	32.33(39.03)	238.1	北西の切れた長方形と長方形	N S	1.07	0	中央		6.44
J 明 中 都 鳳 陽 城	55.03	32.04	231.5	長方形と南西に長方形	E W	1.04	0?	中央		4.08
I 元 大 都	50.71	28.49	250.0	ほぼ正方形		1.12	-2	中央南寄		0.97
J 明 清 代 の 杭 州	49.70	31.89	221.1	不整形長方形	N S	1.86	0	中央北接		4.91
G 宋 東 京 (開 封)	46.12	26.00	261.2	ほぼ正方形	N S	1.08	0	南東隅		1.67
F 隋 唐 洛 陽 城	44.92	27.69	242.0	北西の切れた正方形と南西凸部	同じ	1	0	中央		8.93
J 明 代 南 京 都 城	44.00	33.09	200.5	不整形の円	E W	1.17		中央北接		0.47
G 南 宋 臨 安 城 一 杭 州	39.48	29.81	210.8	不整形長方形	N S	2.36	0	南東隅		1.67
D 漢 長 安 城	34.12	25.30	230.9	北西の切れた南東門の正形的	N S	1.09	0	中央北寄		4.47
B 燕 下 都 武 陽 城 (全 体)	32.89	25.37(28.93)	226.1	正方形2つ				中央北接		7.11
S 新 羅 慶 州 城	31.35	24.71	226.6	長方形2つ	N S	1.17	0	中央北接		7.11
B ~ E 晋 陽 古 城 (宿 白 説)	25.80	20.60	246.6	長方形	N S	1.40	18?	中央北接		1.23
N 平 城 京	25.21	22.11	227.1	長方形の東に	E W	1.16	0	中央北接		1.23
H 金 中 都	24.23	19.67	250.2	長方形	N S	1.19		中央南寄		1.61
N 平 安 京	23.06	19.27	249.2	ほぼ正方形	N S	1.02	0	中央北接		1.63
N 長 岡 京	22.18	18.95	248.5	長方形	N S	1.19	0	中央北接		1.63
B 燕 下 都 武 陽 城 東 部	19.41	17.42	252.9	長方形	N S	1.25	0	中央北接		1.63
B 齊 都 臨 淄	18.37	20.35(22.62)	210.6	ほぼ正方形	N S	1.17	15	北東部?		3.21
F 唐 代 揚 州 城 (全 体)	17.06	17.90(19.72)	230.7	北西北東の切れた方形と長方形	N S	1.24	9	西南隅		3.21
K 百 濟 扶 余 羅 城 全 体	16.51	15.75	258.0	複数の長方形と正方形など	N S	1.78	0			
B 韓 故 城 (河 南 新 鄭 城)	15.74	18.40(21.30)	215.6	不整形	N S	1.16	0?	中央北寄		0.28
B ~ E 晋 陽 故 城 (謝 説)	14.85	15.60	247.0	正方形と東部に北東切れ長方形	N S	1.13	0	主城の中央		0.15
F 渤 海 上 京 龍 泉 府	14.75	15.70	244.6	長方形	N S	1.36	18?			
B 楚 都 鄧 城 一 紀 南 城	14.48	14.79	257.3	北西切れ長方形	E W	1.33	0	中央北接		1.36
G 宋 代 蘇 州 城	13.56	14.84	248.1	北東と北西の切れた長方形	E W	1.25	0	多分中央		
B 魏 都 安 邑 一 禹 王 城	13.46	15.19	241.5	北西の切れた長方形	N S	1.31	0	中央やや北寄り		
B 燕 下 城 武 陽 城 西 部	13.14	15.07	240.5	北部切れ長方形	N S	1.45	44	中央		0.74
E 北 魏 洛 陽 城	11.83	15.47	222.3	ほぼ正方形	E W	1.07	5			
B 秦 雍 城	11.09	13.52	246.3	北東切れ長方形	N S	1.60	5	中央北寄		0.84
J 明 清 代 成 都	10.78	12.77	257.1	3分の1凹形	同じ	1	0?	南西隅		0.31
K 〇 高 句 麗 長 安 城 (平 壤 城)	10.49	16.21(20.0)	199.8	長方形	E W	1.18	32	中央		1.70
B 東 周 洛 陽 城 (周 王 城)	9.79	13.20	237.0	不整形の卵形	N S	1.20	9	北東隅		0.08
B 魯 国 故 城 曲 阜	9.42	11.76	261.0	正方形と西南に凸部	同じ	1	-6.7			
J 河 北 宣 化 城	9.33	12.20	250.4	長方形	N S	1.10		中央		0.40
E 曹 魏 鄴 城 南 城	9.26	12.32	247.0	卵形長方形	E W	1.35	15	中央		0.24
H 遼 中 京 大 定 府 城 (竹 島 説)	8.93	11.78	253.7	ほぼ正方形ほか	E W	1.03	-7	中央北寄		0.87
J 山 西 太 原 城	8.78	11.69	253.5	長方形	N S	1.37	0	中央北接		
E 曹 魏 鄴 城 北 城	8.38	11.75	246.4	長方形	E W	1.14	0			
G 宋 代 揚 州 城 宝 佑 城	1.56	4.85	257.5	正方形	N S	1.03	0	中央東寄		0.40
夾 城	0.56	3.01	248.6	長方形	E W	1.38	0	中央北接		1.25
大 城	6.12	9.78	253.8	長方形	N S	1.24	0			
B 燕 上 都 薊 城	7.89	11.25	249.7	長方形	N S	1.95	0			
E 東 晋 南 朝 建 康 城	7.59	11.03	249.8	ほぼ正方形	E W	1.07	0			
H 金 上 京 会 寧 府 城	7.51	12.38	221.4	ほぼ正方形	N S	1.10	11	中央		0.52
B 蔡 都 上 蔡	7.19	10.47	256.1	長方形と長方形	N S	1.84	0			
				南東切れ長方形	N S	1.37	0	中央南寄		1.49

B	薛	城	6.81	10.59	246.4	北西歪み長方形	EW	1.20	15	中央	
N	藤原	京	6.60	10.46	245.6	長方形	NS	1.50	0	中央北寄	1.06
G・I	宋代	泉州	6.11	11.24	219.9	5角形的	NS	1.23	7	中央?	
B	趙	都	4.85	10.15(12.89)	217.0	北東切れ正方形、正方形と長方形	NS	1.22	-2		
H	遼	上京臨潢府	4.80	9.04(10.61)	242.4	北西南西切れ正方形と長方形	NS	1.58	27		
J	山西	大同	4.57	11.03(14.61)	193.8	正方形と北方形、東と南に不整形	NS	2.31	-4		
B	晋	都	4.07	8.28	243.7	長方形	NS	1.63	2	中央北接	0.50
B	秦	都	4.03	8.07	248.8	長方形	NS	1.25	-12		
K	百濟	公州(旧城)	3.70	9.05	212.5	不整形	NS	1.14	0?	中央北寄	0.12
A	鄭	州	3.37	7.11	258.2	北東切れ正方形	NS	1.22	4		
K	高句麗	大王	3.17	7.32	243.2	不整形	EW	1.27	0?		
B	紀	王	3.13	7.03	251.7	北西切れ長方形 南に三角形 →	EW 同じ	1.55 1	9	中央北寄	
J	山西	大同	3.11	7.58	232.7	ほぼ正方形	NS	1.01	-4		
E	北魏	盛	2.81	7.63	219.7	正方形と不整形	NS	1.13	0		
J	明	清	2.64	6.89	235.8	長方形	NS	1.28	0		
B	楚	都	2.61	6.50	248.5	北東切れ長方形	NS	1.14	-9	北東隅	
J	山西	左	2.47	6.29	249.9	正方形	EW	1.02	0		
(J)無			2.16	5.62	261.5	卵形	NS	1.32	?		
J	山西	平遙	2.14	6.41	228.2	ほぼ正方形	NS	1.02	0		
J	明	清代	2.03	5.72(6.18)	249.1	長方形	EW	1.13	-3		
B	晋	都	2.03	5.78	246.5	長方形	EW	1.36	0		
K	高句麗	丸都	2.03	5.50	259.1	卵形	EW	1.14	-20?		
A	偃師	商	1.90	5.74	240.1	北東切れ正方形の南に長方形	NS	1.69	7		
B	東	周	1.79	5.47	244.6	北西切れ長方形	NS	1.81	-2		
J	山西	太	1.78	5.45	244.8	正方形	同じ	1	0		
F	山西	新	1.77	5.51	241.5	北東と南東の切れたほぼ正方形	NS	1.12	0		
F	唐	高	1.73	5.05	260.5	正方形的な円形	EW	1.09	18	内城中央 中央北寄	0.74 0.03
J	陝西	榆	1.70	6.11	213.4	北西切れ長方形	NS	2.03	17		
D	漢代	河南	1.70	5.44	239.7	北西切れ正方形	同じ	1	-5		
J	山西	右	1.57	5.26	238.2	南東と南西の切れた長方形	NS	1.42	27		
B	晋	都	1.63	5.23	244.1	北東切れ長方形	NS	1.45	0		
I	元	明	1.53	5.14	240.6	北東切れ長方形	NS	2.11	0		
B	魏	都	1.43	4.64	257.7	長方形的西は弧	同じ	1	-4		
J	浙	江	1.41	4.81	246.9	長方形の南は弧	EW	1.43	0		
J	江蘇	南	1.35	5.21	223.0	長方形	NS	2.42	12		
(K)水			1.29	5.15	220.5	不整形で山あり	EW	1.11	0?		
B	晋	都	1.14	4.48	238.3	長方形 北東凸	NS	1.41	0		
I	元	集	1.05	4.29	238.9	ほぼ正方形	NS	1.11	0	中央	0.42
J	南	淮	0.67	3.40	240.7	正方形	同じ	1	0		
B	楚	の	0.65	2.96	272.4	4重の円形	EW	1.24	10	中央北寄	0.07
K	高句麗	国内	0.54	2.84	258.7	ほぼ正方形	EW	1.15	15		
B	滕		0.47	2.77	247.5	長方形	EW	1.35	0	北東隅	
J	奉	賢	0.47	2.75	249.3	正方形	同じ	1	0		
K	高句麗	安	0.43	2.64	248.4	ほぼ正方形	EW	1.75	0?		
I	元	上	0.35	2.38	248.6	正方形	同じ	1	8	中央北寄	0.14 0.02
D	漢	盛	0.32	2.29	247.0	北西切れ正方形	同じ	1	-5		
J	陝西	神	0.25	1.98	252.5	正方形	同じ	1	0		
I	元	應	0.21	1.98	231.4	ほぼ正方形	NS	1.13	?	中央北接	
G・H	西	夏	0.20	1.86	240.4	長方形	EW	1.19	-2		
A	商代	前期	0.06	0.90	272.2	菱形	NS	1.14	10	北東隅	
J	浙江	省	0.02	0.57	248.1	長方形の山城	NS	2.75	33		
(A)村	陝西	省	0.02	0.49	288.6	円形	NS	1.05			

中心に据えて考察を進めたいと考える。

城に関する諸々のデータの概略を、まとめて表

第1表は、本稿で対象とした、東アジアの都

示したものである。面積等の計測に際しては、

同済大学城市劃教研室¹²⁾、葉驍軍¹³⁾、劉敦楨¹⁴⁾、俞偉超¹⁵⁾、李允鈺¹⁶⁾、賀業鉅¹⁷⁾、陳橋驛¹⁸⁾、南京師範学院地理系江蘇地理研究室¹⁹⁾、中国古都学会²⁰⁾、楊鴻勛²¹⁾、上海科学技術出版社『科技史文集』²²⁾などの中国の文献と、村田治郎²³⁾、五井直弘²⁴⁾、上田正昭²⁵⁾、杉本憲司²⁶⁾、藤岡謙二郎²⁷⁾、松丸道雄・永田英正²⁸⁾、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館²⁹⁾、岸俊男³⁰⁾らの業績に収録されている図を使用した。

これら、中国の都城にくわえて、古代朝鮮と日本の都城に関する図については、中国の都城の図と、縮尺や情報量の点で、共通性の高い図を使用することにした。これは、あくまでも同じようなレベルで考察したいと考えたからである³²⁾。

(2)基礎的データの作成 第1表の各欄の説明をしておきたい。

「都城名」は、先にあげた文献で一般的に使

われている名称を使用した。また、時代については、A:商(殷, 毫), B:周をはじめとする春秋戦国時代, C:秦, D:漢, E:三国・晋・南北朝, F:隋・唐, G:五代・宋(このうちHは遼, 金), I:元, J:明, 清以降, K:○:高句麗, Ku:百濟, S:新羅, N:古代日本の都城, というようにアルファベットで示した。

次に、「全体の面積」は、デジタイザー(自動面積測定機)を使用して、前記の収集した図によって、計測した³³⁾。単位は、km²、小数点3位以下を四捨五入している。しかし、収集した図の縮尺は、数千分の一から数万分の一が主で、中にはごく少数ながら数十万分の一の図も含まれている。したがって、表示した数値のうち、かなり正確な数値がある一方、相当に不正確な数値も含まれている。それゆえ、表示した数値は、大縮尺の図を使用できた場合でせいぜい近

- 12) 同済大学城市劃教研室編『中国城市建设史』, 中国建筑工業出版社, 1981, 1—215頁。
- 13) 葉驍軍編『中国都城歴史図録 第一集』, 蘭州大学出版社, 1986, 1—227頁。『同第四集』, 同, 1987, 1—178頁(ほかに付録が101頁)。
- 14) 建築科学研究院建築史編委会組織編写, 劉敦楨主編『中国古代建築史』, 中国建筑工業出版社, 1980, 1—408頁。
- 15) 俞偉超『先秦兩漢考古学論集』, 文物出版社, 1985, 34—53頁。
- 16) 李允鈺『華夏意匠—中国古典建築設計原理分析』, 広角鏡出版社(中国建筑工業出版社重印), 1984, 375—407頁。
- 17) 賀業鉅『考古記管国制度研究』, 中国建筑工業出版社, 1985, 1—180頁。
- 18) 陳橋驛主編『中国六大古都』, 中国青年出版社, 1983, 1—297頁。
- 19) 南京師範学院地理系江蘇地理研究室編『江蘇城市歴史地理』, 江蘇科学技術出版社, 1982, 1—219頁。
- 20) 中国古都学会編『中国古都研究』, 浙江人民出版社, 第1・2・3輯, 1985・86・87所収の諸論文(351, 235, 283頁)。
- 21) 楊鴻勛『建築考古学論文集』, 文物出版社, 1987, 81—93頁, 201—209頁, 285—331頁。
- 22) 上海科学技術出版社の『科技史文集』の第5輯(103—123頁)と第11輯(14—43頁)の論文。
- 23) 村田治郎『中国の帝都』, 綜芸舎, 1981, 1—378頁。
- 24) 五井直弘『中国古代の城』, 研文出版, 1983, 1—252頁。
- 25) 上田正昭編『都城』, 社会思想社, 1976, 1—389頁。
- 26) 杉本憲司『中国古代を掘る』, 中央公論社, 1986, 1—210頁。
- 27) 藤岡謙二郎編『講座考古地理学 2 古代都市』, 学生社, 1983, 221—248頁。
- 28) 松丸道雄・永田英正『中国文明の成立』, 講談社, 1985, 1—277頁。
- 29) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『中国の都城遺跡』, 1983, 1—84頁。
- 30) 岸俊男編『中国の都城遺跡』, 同朋舎, 1982, 1—126頁, 同編『中国江南の都城遺跡』, 同朋舎, 1985, 1—152頁, 同編『都城の生態』, 中央公論社, 1987, 1—458頁, 同編『中国山東・山西の都城遺跡』, 同朋舎, 1988, 1—135頁, 同『日本古代宮都の研究』, 岩波書店, 1988, 1—580頁。
- 31) 上にあげた文献は、あくまでも、1980年代以降に出版された文献がほとんどである。それ以前の主要な関連文献は、村松伸編『中国都市史研究の概況と文献目録』(東京大学工学部アジア都市研究会, 1981, 1—54頁)にリストアップされており、その数は膨大な数に及ぶ。しかし、今回の作業を実施するにあたっては、上記の文献だけで、ほぼ充分であった。それは、現在までに公表されている具体的な都城のプラン図のほとんどが、これらに収録されているからである。結果として、作業用に採用した図は、前記の文献のうち、主として、注12)・注13)・注14)のものである。なお、補足的に、注23)・注24)と注30)の『中国の都城遺跡』・『中国江南の都城遺跡』・『中国山東・山西の都城遺跡』に収録されている図を採用することとした。
- 32) 正確を期すために、参考とした文献に収録されている都城図は、すべて比較・検討した。その結果、同じ原図によることは明らかであるが、書き換えや印刷の過程で、歪みの生じている図や、スケールが不正確になっている図などのあることが、判明した。逆にいえば、各種の文献に引用されている図のうち、スケールが欠如していたり誤っているもの、あるいは縮小率の誤っているもの、方位が欠如しているものなど、不正確な図の多いことに驚いた。
- 33) 滋賀大学教育学部地理学教室の武藤工業のデジタイザーを使用。プログラムは内田論氏作成によるもの。

似値であり、極端に小縮尺の図しか使用できなかった場合は、いわば一種のガイド数値とでも表現せざるをえないものである。ただ、本稿で論述する内容は、それほど正確で決定的な数値を必要とはしない。したがって、ここに表示した数値は、筆者の意図からすれば、一応は必要十分条件を満たしていると言ってよい。

「外周」は、上記と同様の手法によって、計測した城壁の長さである（単位は km）。ただし、中国の都城には、いくつかのブロックの複合的なものもあり、その場合は、城壁の長さを外周だけでは表現しえない。（ ）内に示した数値は、このような都城における実際の城壁の総長である。また、新羅と日本の都城は、原則として、城壁を有していない。

「整形度」という表現については、説明の必要がある。実は東アジアの都城についてひとつの大きな基準になる形態は、正方形であることが予想される。そこで、全体の面積の数値の平方根を外周の数値で除した値に1000を乗じた数値を、ひとつの指標として利用することを試みた。この簡単な計算によって得られた数値が、250である場合は、原則として、正方形であることになる。また、250より小さくなればなるほど、原則として、細長い長方形や不整形であることになる。反対に、280程度にまでちかづくほど、原則として、円形に近い形態であることを示す。ここで、あえて原則として、という表現を使用したのは、複雑な形態をしている場合は、250といっても必ずしも正方形であるとは限らないからである。「全体の形態」については、可能な限り、簡潔な表現にとどめた。

「長辺 NSかEWか」は、南北もしくは南北に近い長さ、東西もしくは東西に近い長さ

のいずれの方が、距離としては長いのかを示したものであり、次の欄は、前記の南北軸もしくは東西軸のいずれかの長辺の長さを短辺の長さで除したものである。なお、この場合の長辺・短辺は都城の本体のみではなく、突出部分をも含めたものである。

「方位」は、前記の各図に記入された方位線から、図の上で計測したものである。したがって、必ずしも絶対的に正確なものであるとはいえない。あくまでも、概数である。表に示した数値は、南北軸の北側が、北を指している場合は0、プラスは北から東へ何度傾いているか、マイナスは北から西へ何度傾いているかを示している。

宮城の位置と面積は、先の図に記入されているもののみについて示している。いくつかの宮城がある場合は、原則として最も重要なものを記し、また宮殿や皇城が区別されている場合も、原則としては最も広いものを対象とした。³⁴⁾

III 都城の規模

(1) 都城全体の面積とランク 第1表に示したように、本稿で、対象とした都城は、98になるが、重複分も含まれているから、実際の都城数は、もう少し少ない。³⁵⁾しかし、検討に際しては、重複しているものも、一応、それぞれが独立した単独の都城として、扱うことにした。これは、各時期ごとに、新しいブロックが建設されている例も多く存在するからである。そこで、まず、都城全体の面積を、比較検討したい。

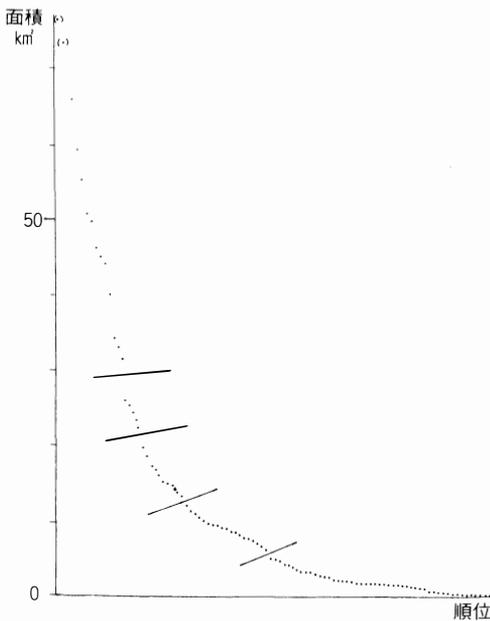
対象としてとりあげた都城のうち、最も広い面積を有する都城は、秦都咸陽でありその面積は、約 170 km² である。もっともこの都城は、完全に復元されているとはいえないので、数

34) なお周濠の有無や河川との関係などについても検討することを試みたが、収集した図に記載されない場合も多く、本稿ではこの面に関する考察を見送らざるを得なかった。これらの点は非常に重要な意味を含んでいることは言うまでもない。後日を期したい。

35) 晋陽故城については、宿説と謝説の両方をあげており、また燕下都武陽城のように、全体と東部・西部というように重複して扱っているものもあるから、実際の都城数は、もう少し少ない。

値は、あくまでも推定値でしかない。しかし、第2位の唐長安城の約89 km²以下の面積は、図の誤差・計測時の誤差はあるとしても、おおむね実際の面積に近いと言ってよい。

いずれにせよ、第1図を見れば、対象としてとりあげた約100の都城は、面積からする限り、いくつかのランクに分けることができそうである。すなわち、秦都咸陽から新羅慶州までが第1ランク、宿白説の晋陽古城から長岡京までが第2ランク、燕下都武陽城東部から燕下都武陽城西部までが第3ランク、北魏洛陽城から宋元代の泉州城までが第4ランク、趙都邯鄲以下を第5ランクとして区分しておきたい。先の第1表中の横線は、このランク分けの線である。



第1図 都城の面積

このように、ランク分けした場合、中国の都城については、ごく当然のことではあるが、“大きい国の大都市は面積も広い”ということができる。言い換えれば、第1ランクに含まれ

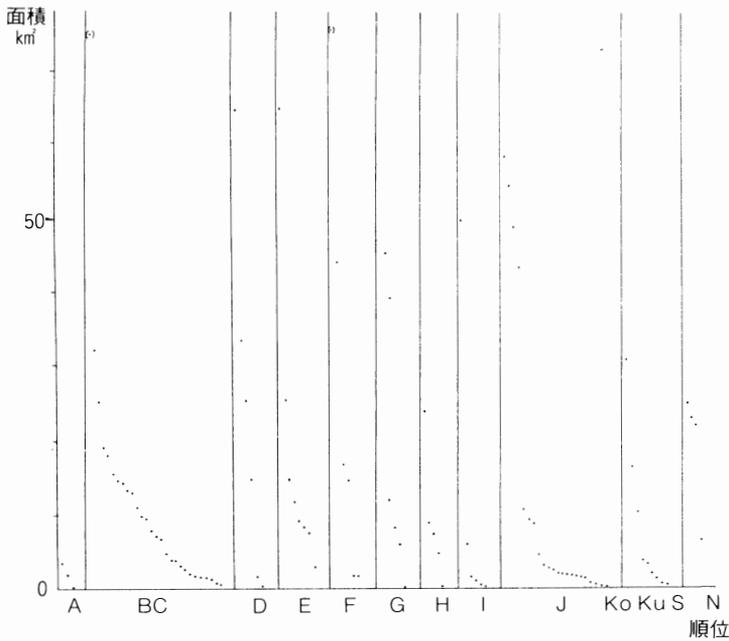
る都城のほとんどは、秦、唐、漢、清、明、元、隋という、いわば大帝国の首都であり、それ以外のものも、明の中都、明清時代の杭州、南宋時代の杭州というように、前者に準ずるものである。第1ランクに含まれる燕下都武陽城は、東部と西部をあわせたものであるから、一つの都城として考えるのは無理があるとすれば、第1ランクのうちで、大帝国の首都もしくはそれに準ずるものという枠に該当しないのは、わずかに新羅の慶州のみであるということになる。これに対して、第2ランク以下の中国の都城には、統一帝国の首都といったものは、ほとんど含まれず、統一に至る過程の、もしくは分裂後の、地方的な国の都城であると言ってよい。

ところが、このようないわば当たり前の事実の中で、例外的なものが、第1ランクの新羅の慶州と、第2ランクに含まれる日本の平城京・平安京・長岡京ということになる。新羅や日本は、私見からする限り、大中国のせいぜい一地方でしかなく、その点からすれば、第3ランク以下に含まれる中国の各国の都城と同程度の都城であっても、さして不思議ではない。にもかかわらず、新羅や日本が、そのいわば分際よりも過ぎた都城を建設したことは、注目すべきである。このことに関しては、新羅も日本も、第1ランクの都城をその目標にしたことを推定しておきたい。中国において、理想的な都城を建設したのは、大部分が、漢民族ではなく、異民族であった。その理由については、様々なことをあげうと思うが、本来の中国的なものに対する憧憬と、その具現化への意気込みという理由を、一応、あげておきたい。

なお、高句麗や百済の都城が、新羅のそれよりはるかに小規模であることは、後述の形態上の未整備さと深く関連するものと予想される。

36) 第1図・第2図ともに、秦都咸陽・唐長安城は、作図の関係上、()に入れて実際よりは、下に表示している。第3・4・6・7・8図も同様。

37) これは、さらにいくつかのランクに分けうるかもしれないが、一応ひとつのランクと見做しておく。



第2図 時代別・地域別の都城の面積

一言で言えば、新羅に対して、高句麗と百済は、その都城の移転もはげしく、いずれも短命の都城であった事実、国自体も短命であった事実にかかわってくると考えたい。

次に、各時代・各地域ごとに分けて、都城の面積を比較したい。第2図によって、おおよそ次のようなことを指摘することができるであろう。

中国の都城については、以下のことを指摘できる。各時代ごとに分けて見れば、Aの商時代の都城は4つとも第5ランクに属する。鄭州商城、偃師商城、商代盤龍城と参考のためにあげた陝西省の集落遺跡であるから、その支持基盤の弱さからも当然であるといってよい。次いで、BCの春秋戦国時代の場合、秦の咸陽はこの時代の最末期に建設されたものであるから、例外的なものとして省き、燕下都武陽城も東部・西部をあわせたものであるから省く。第2ランクの宿白説の晋陽古城もB～Eというように必ずしも春秋戦国期に、約26km²もの都城が成立していたとは限らない。それゆえ、春秋戦国時

代の一般的な都城は、第3ランクに7、第4ランクに6、第5ランクに12が属することになる。次に、Dの漢代については、第1ランクは漢魏洛陽城と漢長安城、第2ランクと第3ランクには晋陽古城の両説のもの、その他は、第5ランクの2つということになる。

さて次のEの三国・晋・南北朝時代については、北魏洛陽城、曹魏鄴城の南城と北城、東晋南朝建康城の第4ランクに属するものが、大きい意味を持つように思われる。

Fの隋・唐時代の場合は、第1ランクの唐長安城と隋唐洛陽城、第3ランクの揚州城と渤海上京龍泉府では、その母体（支持基盤）に明確な差があることから当然のように思えるし、第5ランクのものも同様である。

このような大規模な都城と小規模な都城との明確なランク差は、それ以降も顕著に見られる。Gの五代・宋時代においては、第1ランクの宋東京（開封）・南宋臨安城（杭州）のほかは、全てが、第3・4・5ランクのものである。また、Hの遼・金では、第2ランクの金中都以外は、

第4ランクと第5ランクのものである。Iの元時代の場合も、第1ランクの元大都以外は、全てが第4ランク・第5ランクに含まれる。Jの明・清時代の場合も、清代北京城・明中都鳳陽城・明清代の杭州・明代南京都城が、第1ランクに含まれるほかは、全て第4ランクと第5ランクに属しているのである。

要するに、商時代には小規模な都城のみであったのが、春秋戦国時代になると、大規模なものから小規模なものまで一応まんべんなく存在するようになり、隋・唐時代以降は、大規模な都城と小規模な都城の、いずれかに両極分解していく傾向が認められるということになる。

この傾向は、あるいは、本稿で対象としている都城の偏りによるものかもしれない。例えば³⁸⁾宿白は、隋唐都市は、京城、都城、大型州府城、中型州府城、小型州府城と県城の5つの類型に分けられると述べている。この論文は、本稿でいう、東アジアの都城には面積から見るかぎり階層性がある、ということを補強してくれるものであるが、しかし一方では、隋唐時代以降は、階層が両極分解していくという傾向が強い、ということに対するひとつの反証ともなりうるものである。したがって、いま述べたことは、データを増やした上で、より慎重に検討しなければならない。

次に、高句麗と百済の都城は、先にも述べたように、規模が小さい。高句麗の場合は、第4ランクに高句麗長安城、第5ランクに国内城と安鶴宮が入るに過ぎず、あとは第5ランクに大城山城と丸都山城が含まれる。筆者は、高句麗の安鶴宮について、大城山城と対をなす都城であるとの考えには、賛同しかねている。それは、

まさにひとつのセットとして成立している丸都山城と国内城は、山城から流れる河川によって、都城と連結されているのであり、この関係が次期の高句麗の都城である大同江沿岸でも継承されているとすれば、長安城(平壤)に移る以前の都城は、いわゆる清岩里土城と称される遺跡と大城山城³⁹⁾のセットであった可能性が強いと思うのである。しかし、このことは、稿を改めて論じたい。百済の場合は、第3ランクの扶余城羅城全体と、第5ランクの公州がある。これに対して、新羅の慶州は、その規模や形態からいっても、第一級の都城の名にふさわしい。

そこで、日本の都城である。第2ランクには、平城京、平安京、長岡京が含まれる。これに対して、藤原京は、第4ランクの面積しか有してはいない。後述の形態の所でも述べることになるが、この事実は、相当大きい意味を秘めているのではあるまいか。

いうまでもなく、日本の都城の源流をめぐって、数多くの研究がある。最近では、岸俊男の一連の研究⁴⁰⁾が注目されている。従来から言われてきた隋唐長安城模倣説には批判的で、むしろ藤原京と類似点を多く有する北魏洛陽城に、その源流を求めたほうがよいというのが骨子である。さらに、いわばこの考えのバリエーションとして、曹魏の鄴城や渤海上京龍泉府との共通性を指摘する考えも、秋山日出雄⁴¹⁾らによって提示されている。

しかし、これらの見解に対しては、王仲殊⁴²⁾の反論もある。王によれば、藤原京と北魏洛陽城との間には相当大きい差異も存在するのであり、藤原京が北魏洛陽城を模倣したものと考えることは、無理がある。これに対して、藤原京と唐

38) 宿白「隋唐城址類型」、『橿原考古学研究所紀要 考古学論叢』第10冊, 1984, 17-26頁。

39) 高句麗の長安城に関しては、田中俊明「高句麗長安城の位置と遷都の有無」、『史林』67-4, 1984, 140-161頁や千田剛道「清岩里廃寺と安鶴宮」、『文化財論叢』, 1982, 1015-1040頁などが最近の業績である。

40) 前掲注30)

41) 秋山日出雄「南朝都城「建康」の復原序説」、『橿原考古学研究所論集』第7, 1984, 7-32頁。同「古代宮室発展段階の初歩的研究」、『同』第9, 1988, 611-630頁。

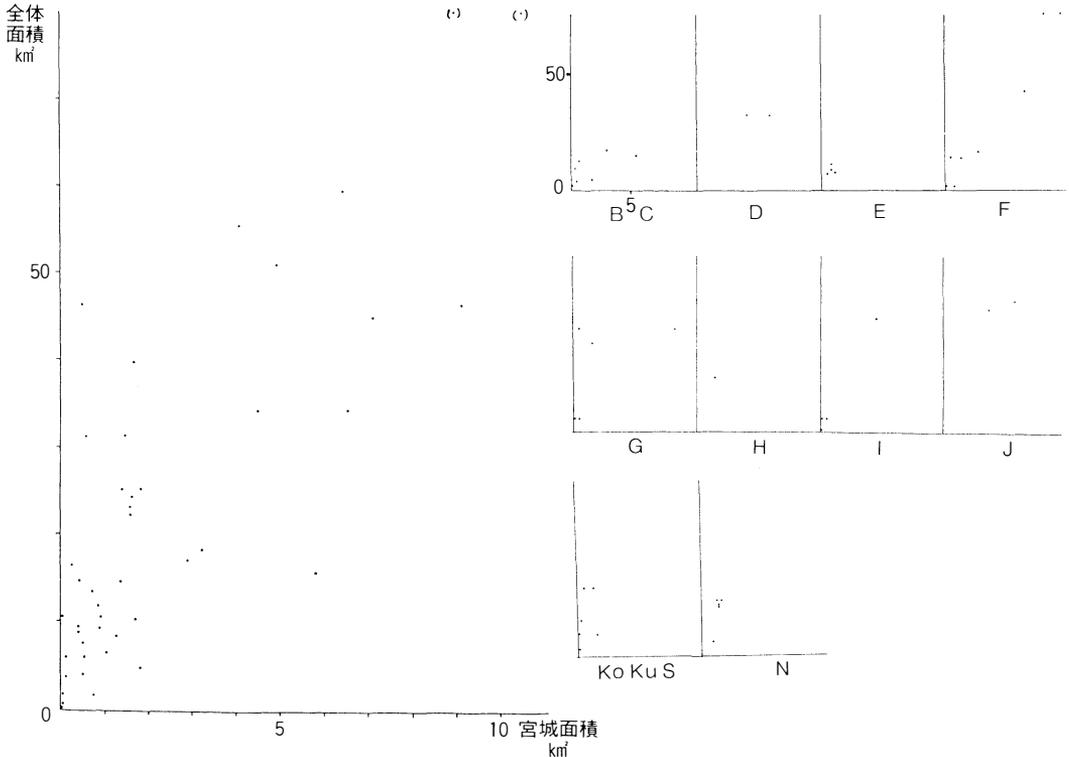
42) 王仲殊「日本の古代都城制度の源流について」、『考古学雑誌』69-1, 1983, 1-30頁。

長安城には違いのあることは確かであるが、なおかつ共通するところも多い。それゆえ、藤原京や平城京などの日本の都城は、やはり唐の長安城や洛陽城を模倣したものとするわけである。

この件に関して、本稿では、それ程深入りするデータを提示できるわけではない。しかし、いま問題としている規模の点からする限り、ひとつの仮説を考えることはできる。すなわち、唐長安城と隋唐洛陽城は、第1ランクに属している。これに対して、平城京・平安京・長岡京は、第2ランクに属する。先に述べたように、日本都城が、都城の支持基盤言い換えれば国力に比較して、その分際を越えるものを建設しようという意気込みによるものだとすれば、少し小規模にはなるが、唐長安城を模倣しようとしたことは、むしろごく自然な姿勢であったように思える。新羅の慶州の場合も、同様に考えていいかもしれない。ここで、形態のことを述べ

るのは、まだ早い。関連するものとして、渤海上京龍泉府を無視することはできない。すなわち渤海上京龍泉府は、第3ランクに属するが、ほぼ同時代の第1ランクに属する唐長安城にきわめて類似する形態を有している。したがって、渤海上京龍泉府が、唐長安城を模倣して、それより少し小規模な都城として建設されたと考えることには、少しの無理もない。平城京の場合も、このことと同様のことが言えるのではないだろうか。

しかしこれに対して、藤原京の場合は、はるかに小規模の都城である。しかも、藤原京が属する第4ランクには、現在、日本都城の源流の有力な候補として挙げられ形態面からの共通性も多い、北魏洛陽城、曹魏鄴城の北・南両城、南朝建康城も属しているのである。とすれば、いささか性急に過ぎるが、藤原京の模範になったのは、これら同じ第4ランクに属する都城の



第3図 都城の面積と宮城の面積

いずれかであり、藤原京はそれより少し小規模となったと考えることは、さほど暴論でもない。

たしかに、藤原京と平城京は、諸々のことを考え合わせると、一つの系譜上に位置すると考えたい面を備えている。しかし、実に、ここに従来の論点の誤り、もしくは誤謬に陥りやすい罫があったのではないだろうか。要するに、規模からする限り、藤原京の源流と、それ以後の平城京などの源流は、別系統であったと考えるほうが自然であるように思えるのである。

(2) 都城の面積と宮城の面積 次に、都城全体の面積と、宮城の面積の関係を考えてみたい。第3図は、対象とした都城のうちで、宮城の面積のかなり確実なものについて示したものである。

ごく大雑把な言い方をすると、両者は、ほぼ相関する傾向が認められる。しかし、第3図の右に示したように、各時代ごとに分けて図示してみると、いくつかの点を指摘できる。たとえば、Gの宋代の都城は、都城の面積に対して、宮城の面積が非常に小さいこと(右の8.93 km²は東京の内城であり宮城は0.47 km²と見たほうがよい)、日本の都城は、大体同程度の規模の宮城を有していること、などである。

なかでも、Fの隋唐時代については、大規模な都城の宮城が、きわめて大規模であることが注目される。すなわち、唐長安城の宮城面積は全体の16.8%、隋唐洛陽城の場合は15.8%にも達するのである。いま試みに、第1ランクから第4ランクまでの都城について、宮城面積の占める割合を計算してみると、10%を越えるものは、他に、清代北京城、漢長安城、齊都臨淄、曹魏鄴城北城、蔡都上蔡、藤原京のみで、これ以外は、いずれも1%から数%程度でしかない。平城京の場合は4.9%、平安京の場合も7.1%である。

これらのことは、どのようなことを示唆しているのだろうか。漢や隋や唐や清の場合は、強大な権力の象徴として、大規模な宮城が造営され、それに反して宋においては、時代精神として質素な宮城が営まれた、というようにごく単純に解釈していいものなのかどうか。現段階では、明確な解答をみつけることはできない。

IV 都城の方位

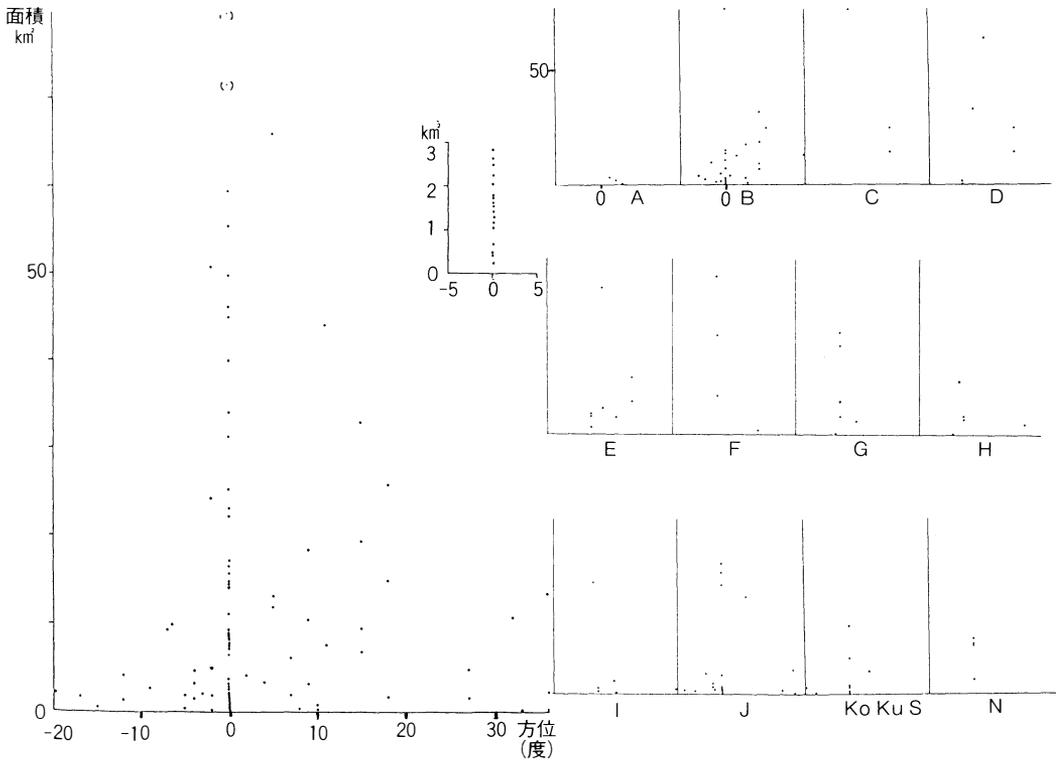
(1) 都城の規模と方位 次に、都城の方位について検討してみたい。先述のように、南北軸の北側が、北を指している場合を0とし、プラスは東への傾き、マイナスは西への傾きとして表現した。その結果を、都城全体の面積とともに図示したのが第4図⁴³⁾である。

第4図を一見すれば、南北軸の北が、正しく北を指す場合の多いことがわかる。宋代揚州城の宝佑城・夾城・大城をも含めて、方位を確かめ得た都城は、98例にのぼるが、このうち、0のものは51例、52.0%になる。また、計測上の誤差などを勘案してプラス10度からマイナス10度までを含めると、この範囲に含まれる都城は76例、実に77.6%にも達するのである。

しかも、0を指す例は、面積規模の大きいものほど多いということを指摘できる。前述のランク別に0を指す例をあげれば、第1ランクでは10/12で83.3%、第2ランクでは4/5で80.0%、第3ランクでは6/11で54.5%、第4ランクでは12/21で57.1%、第5ランクでは19/49で38.8%ということになる。明らかに、大規模な都城ほど、正しい南北軸を意識しているということができるのである。

また各時代ごとに分けて見た場合、それぞれによって顕著な特色を読み取ることはできない。わずかに、B・F・G・H・J・Nにおいて、0を指す例が多いことを指摘できるにすぎず、

43) 都城面積が、3 km²以下の場合、0を指すもののみを特に抽出して図中の中心の上部に示した。また、図の右半部は時代などに分けて示したものである。



第4図 都城の面積と南北軸の方位

したがって、どの時代においても、正しい南北軸が重要視されることが多かったということになる。この傾向は、かなり古い時代に遡ることも理解できる。すなわち、Aの3例はいずれもやや東に傾いているが、北を指す傾向はすでに、Bの春秋戦国時代から認められるからである。

ところで、古代朝鮮については、中国や日本と異なる傾向を指摘できる。対象とした9例のうちで、0もしくは0に近いと確認できる例は、新羅慶州と高句麗安鶴宮のみで、百濟扶余・百濟公州・高句麗大城山城・水原は一応0とはしたものの、実は方位を決定しがたい。高句麗長安城・高句麗丸都山城・高句麗国内城の場合は、明らかに0ではない。これは、すべてが0を指す日本の場合と好対照である。なぜ古代朝鮮に

おいては、正しい南北軸が徹底されなかったのか。これは、古代朝鮮の都城に卵形や円形などのものが多いことによるものと考えたい。

いずれにせよ、東アジア世界における都城は、大規模で整ったものほど、正しい南北軸を重要視していたことは間違いない。南北軸は、いわば最も基準とすべき計画軸であったことになる。また、宮城の位置が、中央北接あるいは中央北寄りのもが多く、南に正面のあるものが多いことを合わせ考えると、南北軸のうちで、特に北が重視されたと言ってよい。東アジアにおいては、いわば北は聖なる方向であった。⁴⁴⁾

多くの都城が、南北軸を重要視していると言う以上、その原則からはずれるものを、どう解釈すればよいのかという問題が残る。このこと

44) もっともこの点に関しては、聖なる方向は北ではなく、むしろその反対の南であったと考えるほうがよいのかもしれない。陰なる北、陽なる南という把握のほうがよいのかもしれない。また視点を宮城側に置くのか、あるいはその反対に置くのかによって変わってくる。河野氏の指摘にもあるように、あらためて風水思想などもからめて検討したい。

は単に形態の不整形だけで片付け得ることではないように思われるが、現在のところ明確な解答を見出すことはできない。

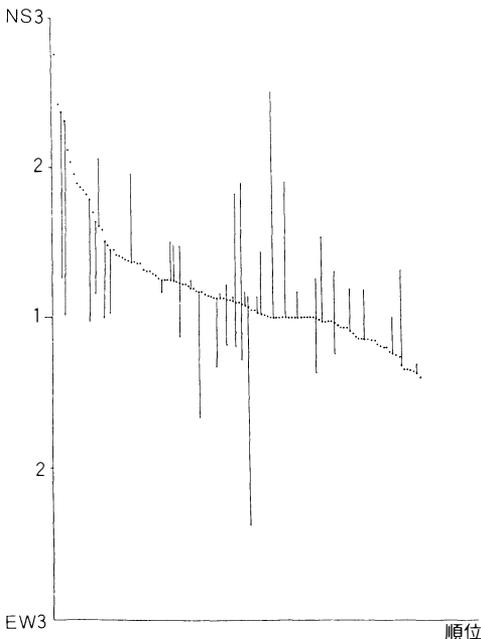
(2)南北と東西 次に、第5図は、都城が、南北方向・東西方向のうち、どちらの方が長いかを示したものである。まず、対象としたすべての都城の外形で、南北方向のうち最も長い距離と東西方向のうち最も長い距離を計測し、前者のうち長い方の数値を短い方の数値で割った数値を縦軸に示した。したがって、縦軸の1は、東西の長さや南北の長さが等しいことを表している。また、例えば、1よりも上でNS2なら、南北方向の方が東西方向の2倍の長さであることを示す。もっとも、各方向のうち最も長い距離を計測したものであるから、1であると言っても、必ずしも正方形というわけではない。また、横軸には、南北に長いものから東西に長いものへの順位を示した。さらに、対象とした都城のうちで、宮城の形態が判明しているものについては、該当する都城全体のポイントの上または下に、宮城に関する同様の数値を示して、

直線で結んだ。

この図から、以下のようなことを指摘することができる。まず第一に、1よりも上、すなわち1とNS3との間に、大部分の都城が含まれるということである。いま宋代揚州城を3つに分けていえば、対象とした都城は100である。このうち1を含めてそれよりもグラフの上に位置している都城の数は72、実に72%もの高率を示していることになる。しかも、この傾向は、都城面積規模の大小とはおおむね無関係である。つまり、先のランクごとに見れば第1ランクでは75.0%、第2ランクでは83.3%、第3ランクでは72.7%、第4ランクでは68.2%、第5ランクでは71.4%が、1より上位に含まれるわけで、ランクによる差はほとんどないといってよい。要するに、都城の規模の大小を問わず、南北方向の長い都城が、圧倒的に多いということになる。このことは、東西の長さに対する南北の長さが最大のものが2.75倍であるのに対して、南北の長さに対する東西の長さが最大のものは1.43倍に止まる事実とも合致している。

この点から、東アジアの都城は、原則的には、南北軸を優先して建設されたと言ってよいのではあるまいか。筆者は、先に、南北軸が基準になる場合の多いことを述べ、かつ北の方向が重視されることを述べた。宮城の位置からも、このことは明らかである。それゆえ南北に長いということは、南北軸の優位性を物語っていると結論づけたい。

しかし、同時に、指摘すべきは、南北に長いものも東西に長いものも、いずれもその倍数は比較的低いという点である。すなわち、1.5倍以内に83%もの都城が含まれているのである。したがって、それほど極端な長方形の都城が存在したわけではない。どちらかと言えば、むしろ正方形が基本になっていると考えるのが適当かもしれない。このことについては、整形度の章で後述する。



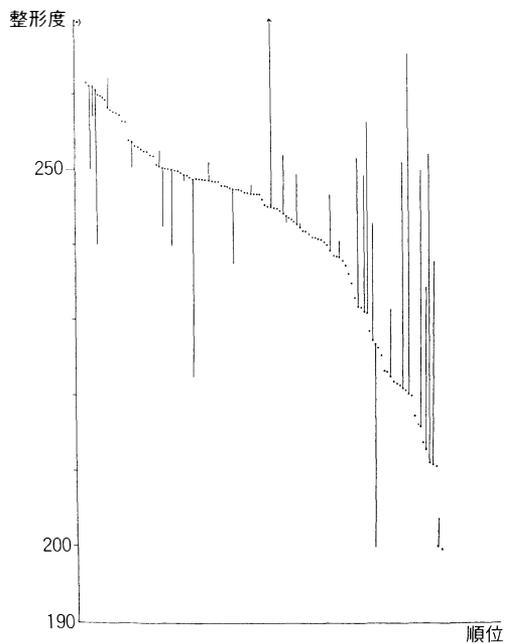
第5図 都城の南北と東西

また、宮城との関係で言えば、都城全体の形態と、宮城の形態は、必ずしも相似ではないことにも注目すべきであろう。⁴⁵⁾ 図の上で言えば、都城全体のポイントと宮城を結んでいる実線の長さはかなり長く、しかも両者の関係はむしろ逆である。すなわち、南北の長い都城は、その倍数に比較して東西に長い方に近い。これとは反対に、南北と東西が同じか、東西の方が長い都城は、南北に長い宮城を有していることが、図から読み取れるのである。すくなくとも南北と東西という観点からするかぎり、いわば都城全体の形態に対して、宮城の形態は、逆志向の発想に基づいているかのように思われるのである。

V 都城の整形度

(1) 都城の整形度と宮城の整形度 都城と宮城の形態を、簡単な数値で表現するために「整形度」という数値を算出してみた。先にも述べたように、この数値は、原則として250の場合は正方形ということになり、250より上になるにつれて円形に近くなり、また反対に250より低くなるにつれて長辺と短辺の差が大きい長方形もしくは不整形になる。これはあくまでも原則であり、多辺形になればなるほどこの原則には整合しないことはすでに述べたが、本稿で対象としている例の大部分は、⁴⁶⁾ ほぼこの原則に当てはまると言ってもよい。

第6図は、この整形度を順位別に示したものである。さらに第5図と同じように判明しているものについては、宮城の整形度も示した。都城の整形度の最高値は、陝西省の集落遺跡の288.6であり、それに次いで楚の奄城の274.2となる。これに対して、最低値は、山西大同城の193.8であるが、この場合は複合的な全体の数



第6図 都城の整形度

値であり、同城の中央部は232.7であるから、最低値とするには少し問題がある。したがって、これを除けば、高句麗麗長安城の199.8や明代南京都城の200.5が最も低い値ということになる。ただこれらの例は、どちらも全体から見れば、やや特殊なものであり、大部分は260から210の間に含まれている。しかし全般的に言えば、254以下240以上の数値に、かなりの都城が集中している傾向が強いことを強調しておきたい。それゆえ、ごく大まかな言いかたをすると、東アジアの都城の多くは、正方形もしくは正方形に近い長方形が大部分を占めていることになる。また、日本の都城と朝鮮三国の都城を比較した場合、平城京の外京を除外して見ると、日本の都城の方が、240~250のごく狭い範囲に含まれるのに対して、後者は約260から約200までの非常に大きいばらつきを示している。このことは、先にも述べたように、朝鮮三国の都城に不整形

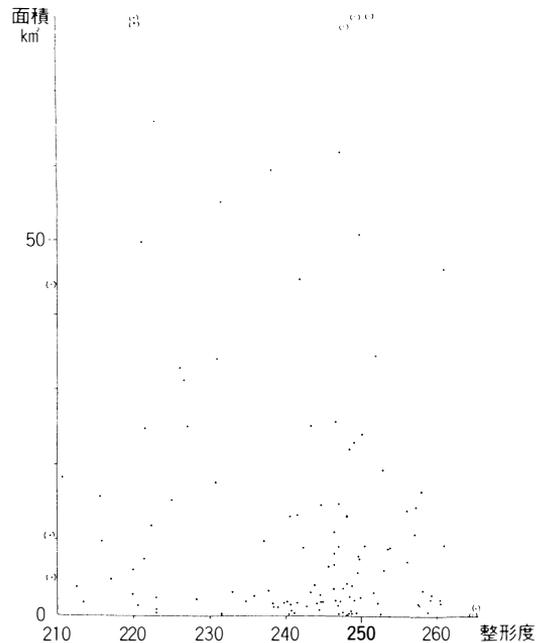
45) 隋唐洛陽城のような例外はもちろんある。

46) この「整形度」は同時に、ある一定の面積を囲む場合の城壁の効率度でもあり、将来検討したい城壁建設に要した労働量と都城の規模との考察にも役立つと考えられる。

なものが多いという事実とも符合する。また、都城全体の整形度と、宮城の整形度の関係には明確な関係が存在するように思われることに注目したい。すなわち、整形度が約247より大きい都城における宮城の整形度は、4つの例を除けば、いずれもその都城の整形度の数値よりも小さく、反対に247よりも小さい都城における宮城の整形度は、わずか2つの例を除けば、その他は都城の整形度の数値よりも大きいという事実である。このことは、かなり重要な意味を持っているのではないか。

要するに、円形ないし正方形に近い形を持つ都城ほど、宮城は長方形に近い形を持ち、それとは反対に、長方形の形を持つ都城は、正方形に近い宮城を持っているということである。あえて言えば、都城とその宮城とは、正方形か長方形かという観点から見れば、逆の形態を志向していると言ってよい。このことは、先に述べた、南北が長いか東西が長いかという観点から見れば、都城と宮城は、逆志向の発想に基づいているのではないかという指摘と、ある意味では見事に合致している。異なる形態を有することによって、都城と宮城は、その形態上における差を、いわば相殺してバランスをとるという理念があったと考えたい。しかし、この点に関しては、この種のことが本当に言えるのか否かの検証と、その背後に潜む意味を探る必要があることは言うまでもない。

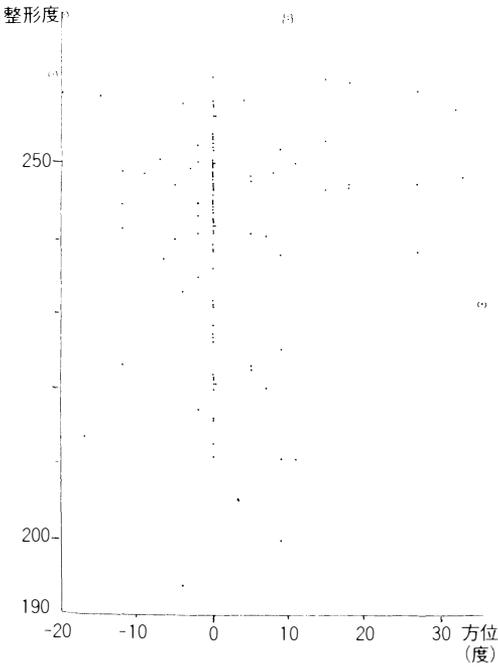
(2) 都城の整形度と規模・方位 次に都城の整形度と面積の関係を示した第7図によれば、先に述べたことと同様に、朝鮮三国の都城のばらつきを指摘できる。なぜ朝鮮三国の都城には不整形なものが多いのであろうか。これに関しては、大規模な河川が朝鮮の都城において重要な役割を果たしていることを主要な原因と考えたい。すなわち、高句麗の平壤(長



第7図 都城の整形度と面積

安)城、百済の公州城(熊津)・扶余(泗沘城)などは、都城プランの一環として河川を利用している。しかもこれらの都城における河川は、流れを容易に変えることができるような河川ではなく、水量も非常に多い大河川である。これらの河川を利用し、羅城を組み合わせ、しかも山をも取り込んでいる。したがって、結果として不整形にならざるをえなかったと考え得る。この点、同じ朝鮮三国の都城でありながら、直接的に大河川を組み込まなかった高句麗の国内城や新羅の慶州は、整形を実現することが容易であった。これに対して、同じく河川で囲むという発想を一部で採用している日本の都城の場合、コントロールしやすい河川であった点が大いに異なるのである。またこれ以外にも、小規模な都城が、240~250の間に集中する傾向が、より強いように思われるが、このことについては、次章で述べたい。第8図で示した都城の整形度と南北軸の方位との関係については、特筆

47) 高句麗国内城は鴨綠江と不可分な関係にあるが、平壤のように都城プランとの直接的な関係は有していない。



第8図 都城の整形度と南北軸の方位

すべき特徴をあげることはできない。

VI 都城の形態

(1) 都城の形態と規模 次に、都城の平面形態について考察したい。そこで、第9図と第10図を作成した⁴⁸⁾。このような図を作成して、考察する背景として、「中国の都城には二型式がある」という従来から指摘されてきた説がある。すなわち、宮城を都城の中央部に置く『周礼』型都市は、すでに前漢にはすでにその原型はできていた。しかし、これに対して、宮城を都城の中央北に置く新しい型式が出現してきたというわけである。

このことに関しては、いくつかの説がある⁴⁹⁾。まず、森鹿三は、北魏洛陽城の拡張に伴って、

『周礼』考工記の理想型とは異なる新しい都城型式の誕生が実現したと考えた。また、那波利貞は、唐の長安城のように宮城を中央北詰めに置く反伝統的型式は、それ以前の北魏洛陽城や東魏鄴都南城にすでに存在しており、北朝胡族系識者の卓絶した識見に基づくものと考えた。また、駒井和愛は、周礼型都市は、魯の曲阜、趙の邯鄲、漢の長安・洛陽、西晋の洛陽にすでにみられるが、唐の長安のように王城を中央北辺に置く型式は、北魏洛陽城や東魏の鄴城において先行して存在し、後の渤海上京龍泉府・東京龍原府、遼の中京大定府・上京臨潢府・東京遼陽府、金の上京会寧府、元の上都にも認められる。しかし、北宋の東京開封府になると、当時の学者による古典としての『周礼』考工記の伝統的型式が復活し、元の大都や、明・清の北京城に踏襲されていくと考えた。さらに、最近では、曹陽の曹魏鄴城あたりから徐々に新しい型式が生まれてきて、南北朝時代にはほぼ決まった形となっていくが、この過程において、南朝の建康城が隋唐の都城につながっていく北魏洛陽城のモデルとされたという注目すべき見解も発表されている⁵⁰⁾。

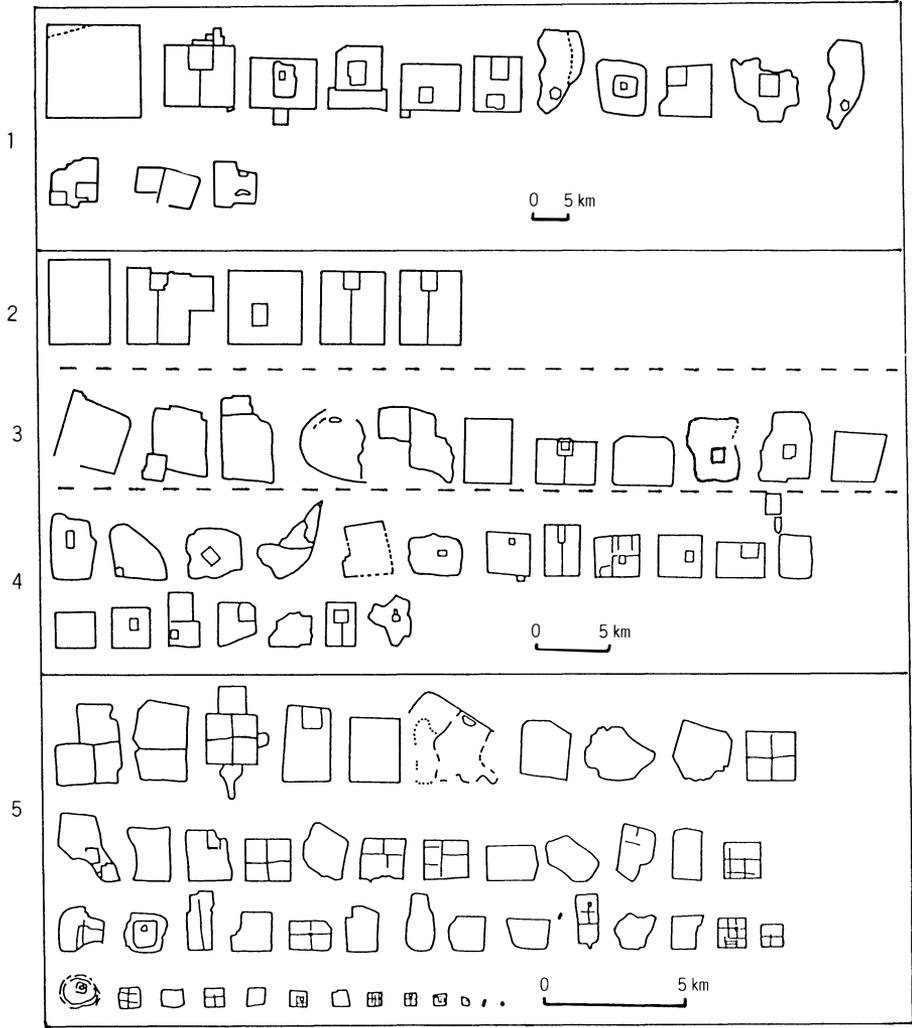
以上の議論は、非常に重要な意味を含んでいる。果たして、以上の議論で指摘されてきたことは、本当に言えるのであろうか。そして、現段階で最終的な結論にまで及ぶことは無理としても、何か付け加えるべき新しい事実はないものであろうか。

第9図は、都城の面積順ランク別に、その形態図を並べたものである。この図には、かなりの情報が含まれているが、ここでは一応、先の

48) 作成に当たっては、本稿で資料とした各都城の図をもとにして、かなり大胆に簡略化した。細部にこだわるより、むしろ簡略化したほうが、大筋を把握しやすいと考えたからである。したがって、都城の外郭と骨格をなす城壁、宮城、都城内の主要な道路のみを、記載することにした。また、図の縮尺については、全てを同じ縮尺にすること避けた。これは、作図上の技術の問題もあるが、むしろ縮尺を各々について変えることによって、形態の比較が容易になると考えたからである。そこで、第1ランクの都城図の縮尺に対して、第2、3、4ランクはその2倍、第5ランクは、さらにその2倍とした。各々の都城名は、第9図の下に、ランクごとに分けて示している。

49) 前掲注25) 所収の岸俊男「日本の宮都と中国の都城」、101-139頁など。

50) 曹陽「中国歴史城郭構式の考察」、『待兼山論叢』22号、1988、21-41頁。



1	1行目…秦都咸陽 唐長安城 漢魏洛陽城 清代北京城 明中都鳳陽城 元大都 明清代の杭州 宋東京（開封） 隋唐洛陽城 明代南京都城 南宋臨安城（杭州）
	2行目…漢長安城 燕下都武陽城（全体） 新羅慶州
2	3行目…晉陽古城（宿白説） 平城京 金中都 平安京 長岡京
3	4行目…燕下都武陽城（東部） 齊都臨淄 唐代揚州城（全体） 百濟扶余 韓故城（河南新鄭城） 晉陽故城（謝説） 渤海上京龍泉府 楚都郢城（紀南城） 宋代蘇州城 魏都安邑（禹王城） 燕下都武陽城（西部）
4	5行目…北魏洛陽城 秦雍城 明清代成都 高句麗長安城（平壤城） 東周洛陽城（周王城） 魯國故城曲阜 河北宣 化城 曹魏鄴城南城 遼中京大定府城 山西太原城 曹魏鄴城北城 宋代揚州城
	6行目…燕下都薊城 東晉南朝建康城 金上京會寧府城 蔡都上蔡 薛城 藤原京 宋元代泉州城
5	7行目…趙都邯鄲 遼上京臨潢府城 山西大同城 晋都絳城 秦都櫟陽 百濟公州 鄭州商城（毫または傲） 高句 麗大城山城 紀王城 山西大同城（中央部）
	8行目…北魏盛樂故城 明清代揚州城 楚都郢城（楚皇城） 山西左雲城 無錫 山西平遙城 明清代河南安陽城 晋都新田（台神古城） 高句麗丸都山城 倭師商城（西毫） 東周陽城 山西太谷城
	9行目…山西新絳城 唐高昌故城 陝西榆林城 漢代河南鼎城 山西石玉城 晋都新田（牛村古城） 元明代揚州城 魏都魏城 浙江鎮海 江蘇南通城 水原 晋都新田（平望古城） 元集寧路城 南瀝城
	10行目…楚の奄城 高句麗國內城 滕城 奉賢城 高句麗安鶴宮 元上都 漢盛樂城 陝西神木城 元應昌路城 西 夏黑水考城（内モンゴル） 商代前期盤龍城 浙江鎮海威遠城 陝西省臨潼姜寨村の仰韶期聚落遺跡

第9図 面積順の都城の形態（左端の数字は面積のランク，上図の該当都城名は下表に示した。下表の○行目は図の行を示す。）

議論を軸に据えて考察を進めたい。したがって、都城における宮城の位置が中心的な問題となる。

そこでまず、a 宮城が都城の中央部（厳密な中心部でないものも含む）にあるもの、b 宮城が中央部にあるばかりではなく正方形の都城で道路から見てもほぼ完全な周礼型都市もしくはそれに準ずるもの、c 宮城が中央北に接し、かつ都城の形態や中軸線にあたる道路などからしても隋唐の長安城型と言いうるもの、d 宮城が北東隅などのコーナーにかたよっているもので上記のいずれにも該当しないもの、という4つのタイプに分けてみた。その結果、宮城が複数存在する都城では、aとc、cとdの混合タイプや、cタイプのかなり崩れた都城の存在することも判明した。

これらをまとめたものが、第2表である。まず全体として、aタイプは16、bタイプも16で、周礼型都市もしくはそれに準ずるものや近いタイプが非常に多いことに注目すべきであろう。これに対して、cタイプの隋唐長安城型は、日本の3例（平城京・平安京・長岡京）を含めてわずか6例（唐長安城・渤海上京龍泉府・曹魏鄴城北城）でしかない。aとcの混合タイプのなかにもcタイプに近いものはあるが、それとてacタイプは5例しかないのである。要するに、東アジアの都城の大部分は、周礼型都市を基本にしたものが多いといえることができるのである。

また、ランク別にみた場合、bタイプの16例のうち15例が、第5ランクに属する事実は、特筆すべきであろう。すなわち、完全な周礼型都市もしくはそれに準ずるもの⁵¹⁾は、規模の点で最も小さい都城においてしか認められないのである。もっとも、aタイプは、第1ランク4、第2ランク1、第3ランク2、第4ランク7、第

第2表 ランク別の都城と宮城の類型

	a	b	c	d	a c	c d	c ?	不明	合計
第1ランク	4	—	1	4	3	—	—	2	14
第2ランク	1	—	3	—	—	—	—	1	5
第3ランク	2	—	1	3	—	—	1	4	11
第4ランク	7	1	1	4	2	—	—	4	19
第5ランク	2	15	—	2	—	1	2	26	48
	16	16	6	13	5	1	3	37	97

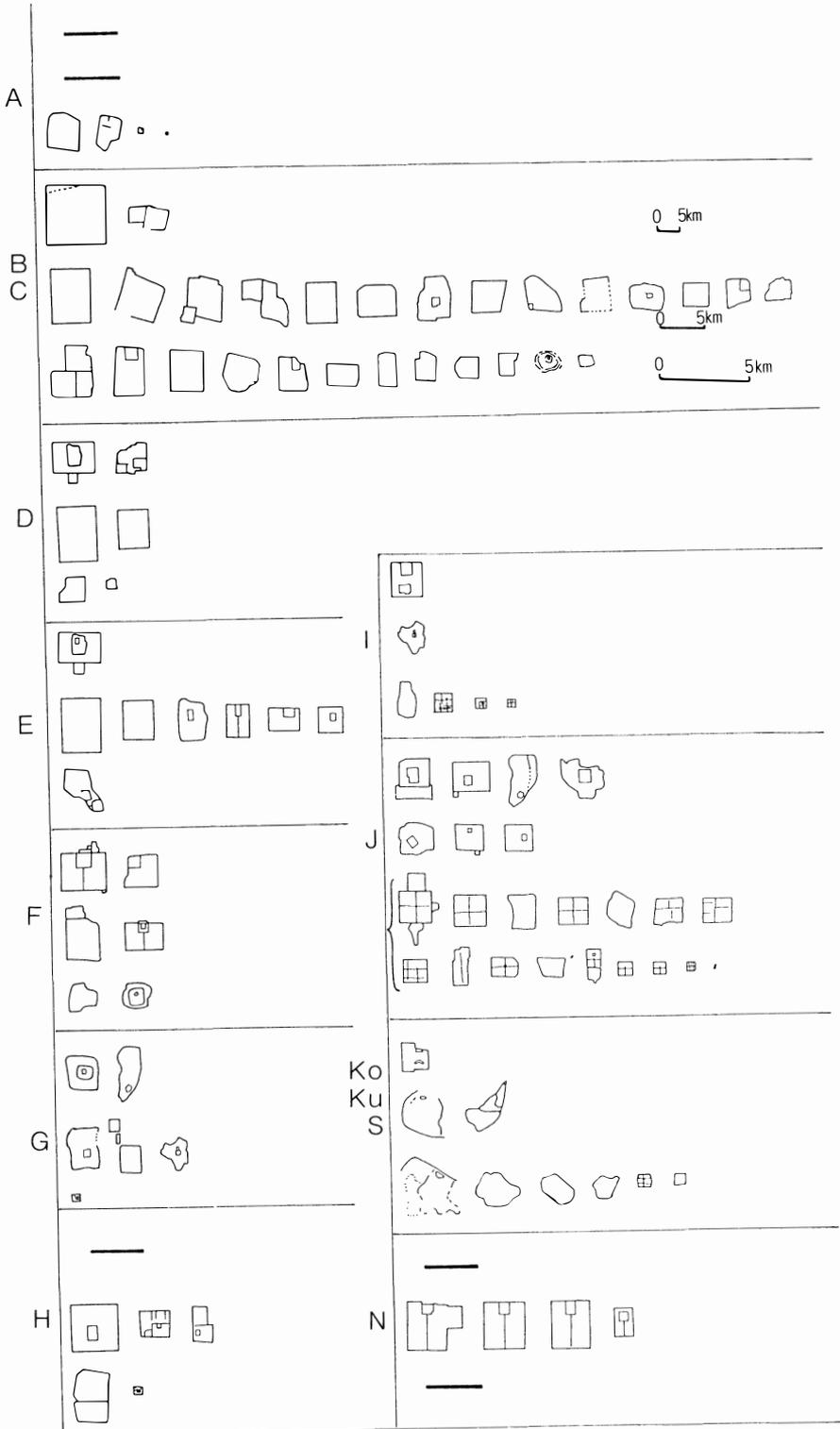
5ランク2と言うように、一応まんべんなく存在する。そしてその大部分は、宋代蘇州城・清代北京城・明代中都鳳陽城・宋東京開封、金中都などのように、字の形で表現すれば、「回」の字型であり、いわば周礼型都市と言ってよいものである。それゆえ、周礼型都市の伝統は、確かにどのランクにおいても存在している。しかし、最も典型的な周礼型都市、いわば字の形で言えば「回」の字型や「田」の字型、もしくはその簡略型あるいは縮小版と言ってよい「口」の字型の都市は、大都市ではなく、むしろ地方の小都市において実現するのである。

この点に関して、想起されるのは、鄭孝燮⁵²⁾の説、すなわち中国では「方正端莊」の都市計画が基本であり、しかもその典型的なものは、大規模都市ではなく、むしろ中小都市に多いという説である。この鄭氏の説は、基本的には正しく射ていると言ってよい。すなわち、山西大同城中央部・山西平遙城等々がそれに該当するのである。

そのことは、実はかなり重要な意味を含んでいるのではないか。すなわち、中国の伝統である周礼型都市の都城は、最も理想的な都市プランとして、古くから意識されてきた。しかし、その実現は大都市においては困難な点が多く、比較的簡単に建設しうる中小都市においてしか、

51) 前掲注17) および福山敏男「『周礼』考工記の「面朝后市」の説」、『橿原考古学研究所論集』第7号、1984、1—6頁など。

52) 鄭孝燮「中国中小古城布局の歴史風俗」、『橿原考古学研究所紀要 考古学論叢』第11冊、1985、1—26頁。



第10図 時代別・地域別の都城の形態 (A, H, Nの横太実線は該当例のないことを示す)

完全な理想型を作りえなかったと解釈したい。⁵³⁾

(2) 時代別・地域別の都城の形態 それでは、このような理想型は、いつ建設されたのか。

第10図⁵⁴⁾は、時代別・地域別に都城の形態を示したものである。また、先に述べた a ~ d および a c, c d, c ? に分類して示したのが、第3表である。第2表と合計数が違うのは、いくつかの時代にまたがっているものがあるからである。いまタイプ別にみると、a タイプは B C から始まって J に至るまでの間、まんべんなく認められる。このことは、都城の中央部に宮城を置くという発想が、中国では春秋戦国時代以来、明清時代まで最も基本的な原則として継承されていたことを物語っている。

これに対して、最も周礼型都市に近い b タイプは、G, H, I, J, K o (高句麗国内城) にはしか見られず、中国では明清時代に最盛期を迎える。特に、南滙城と奉賢城の相似性に注目したい。すなわち、両者は、全く同じテキストによって建設されたものではなかったのかと考

第3表 時代別・地域別の都城と宮城の類型

	a	b	c	d	a c	c d	c ?	不明	合計
A	—	—	—	1	—	—	—	3	4
B C	3	—	—	4	—	1	1	19	28
D	1	—	—	1	—	—	—	4	6
E	3	—	1	1	1	—	—	2	8
F	1	—	2	2	—	—	—	1	6
G	3	1	—	1	—	—	—	1	6
H	1	2	—	1	—	—	—	1	5
I	1	3	—	—	1	—	—	1	6
J	5	10	—	1	1	—	—	5	22
Ko Ku S	—	1	—	1	1	—	2	4	9
N	—	—	3	—	1	—	—	—	4
	18	17	6	13	5	1	3	41	104

えられるのである。⁵⁶⁾とすれば、およそこの時代において、都市を建設する際に重要視された、いわば「手本」が周知のものとして、一般に流布していた可能性が強いと考えてよい。しかも、先に述べたように、b タイプは規模の小さい都市において顕著に認められるのである。また、本来の漢民族によるものより、むしろ元や清のような異民族によって建設された都市に多い。このことは、異民族のほうが、理想型の実現に対して、積極的であったことと解釈しておきたい。このことは、先述の、周礼型都市に対する新形式の実現に際しても異民族がかなりの役割を果たしたこととも矛盾しない。要するに、王上に対する憧れ・理想の実現への忠実さと使命観とでも表現しうるものではあるまいか。このことは、日本の都城の整形さにおいても認められるように思われる。

隋唐長安城の c タイプは、以上の a タイプや b タイプとは、好対照を示す。すなわち、明瞭な c タイプは、E と F と N にはしか見られない。B の c ? タイプは晋都絳城であるが、c タイプとするにはかなり疑問がある。また、百済の公州と扶余は、おそらく c タイプを志向して建設されたものと考えたいが、先に述べたように、河川や山の影響で方格の形態ではない。したがって、東アジアの都城の典型的な形態というように理解されがちな、すなわち隋唐長安城型の都城型式は、意外にも、それほど普遍的なものではなかったということになる。

ところが、南滙城と奉賢城の相似性を、もう少し広げて考えれば、興味ある事実に到達する。すなわち、元の上都の東南部や應昌路城あるいは南通城の北部、そして先の両者などは、完全

53) 周礼型都市という以上、宮城の位置だけではなく「面朝后市」や「右祖左社」などの原則も含めて考えるべきであるという千田稔氏の指摘（前掲注5）に所収は、正しい。しかし、筆者はこの原則は、新しい時代あるいは地方の小都市になればなるほど守られることが少なくなっていく、単なる形態のみが強く意識されるようになったと考えたい。

54) 縮尺は先の第9図と同様に3種類にしてある。

55) 奉賢城の方が面的には少し小さい。

56) 類似の例は、他にも元の応昌路城や南通城北部などに認められる。

な周礼型都市であると同時に、中央北の中心施設という側面をも実は有しているのである。このことを重要視すれば、あるいは、周礼型都市に隋唐の長安城のアイデアを重ね合わせたものではないかという考えも成立しうるかもしれない。要するに、「中国の二型式の都城」だけではなく、両者の折衷型式をも想定しうるかもしれないのであるが、このことについては、今後、より詳細に検討する必要があることは言うまでもない。⁵⁷⁾

VII ま と め

以上、東アジアの都城について、主として、規模・方位・整形度・形態などの点からの検討を加えてきた。もちろん、あくまでも平面的な検討であり、内部の地割や街路・街区・地名などについての考察をする必要のあることは言うまでもない。しかし、いままでの検討でいちおう判明したことを繰り返して列記すれば、以下のようなことになる。

- ・東アジアの都城には、規模においてランク差が存在すること。
- ・大帝国の首都は大規模であること。
- ・隋唐以後は、規模が両極分解すること。
- ・日本と新羅の都城は、その国力と比較すると、例外的に大規模であること。
- ・藤原京と平城京の源流は、いちおう区別して考えるほうがよいのではないかということ。
- ・都城面積と宮城面積は、ほぼ相関するが、隋唐と宋は逆になり、これは一種の時代精神によるものではないかということ。
- ・全体として、南北軸が重要視されるが、大規

模で整った都城ほど、この傾向が強くなり、正しい南北軸を有すること。

- ・南北と東西の長さについては、南北のほうが長い都城が多いこと。これは南北軸の優位性と符合すること。
 - ・しかし、都城と宮城は、この点に関して、逆志向の原理を有していること。
 - ・東アジアの都城は全体として見れば、原則として、正方形を志向していること。
 - ・しかし、都城と宮城は、この点に関しても、逆志向の原理を有していること。
 - ・高句麗・百済の都城は、河川や山を取り込むことによって、不整形になった例があること。
 - ・東アジアの都城には、明らかに、2つの型式が存在すること。
 - ・このうち、周礼型都市は、小規模で後世になるほど顕著に見られること。
 - ・しかし、主として元代以降は、「二型式」の折衷型式が、周礼型都市をベースにして出現してきた可能性を想定しうること。
- などである。

実は、城壁は中国の北部が発祥地ではないか(騎馬, 土, 風砂など), 山や森に神を意識する日本ではそれらと完全に切り離される城壁は決して好ましいものではないのではないか, 城壁と土工量と人口の関係は相関するのではないかということ, 等々についても予察的な考察はしている。しかし、これらの点に関しては、稿を改めて論じたい。⁵⁸⁾

[付記] 故岸俊男先生をはじめとする中国都城制研究学術友好訪中団や日朝文化研究学術訪朝団の

57) もっとも、以上述べてきた第9図と第10図をもとにした考察は、あくまでも都城に対する宮城の位置を中心とした考察に過ぎず、したがって、細部を検討すれば、また違った側面が浮かび上がってくるかもしれない。しかし、このことは将来の課題としたい。

58) 本稿脱稿の直前に、佐原康夫氏の「春秋戦国時代の城郭について」、『古史春秋』第3号、1986、90—116頁が公開されていることを知った。この論文は、春秋戦国時代の城郭について、立地条件・形式・規模(城郭の最長辺の長さ)・城壁の厚さと高さ・濠・門と道路を綿密に検討したものであり、巻末にはきわめて精密な春秋戦国・秦漢都城址表と図および都城遺址発掘報告文献リストも収録されている。本稿では、筆者とある意味では類似の観点に立ったこの貴重な論文を活用することができなかった。いざしれあらためて論じてみたい。

団員諸氏に心からの感謝を捧げたい。団員諸氏の友情がなければ、本稿は成らなかったであろう。団員の堀内明博氏には貴重な文献を貸与いただき

たし、横田篤氏には要旨の翻訳についてのご協力を得た。（滋賀大学教育学部）

東亜の都城遺跡

高橋 誠 一

筆者曾多次巡遊過中国各地和朝鮮半島の都城遺跡。当時不止一次發現了許多和日本都城遺跡的共同点。不過同時也痛感了雖均處在於東亜但由於地方，時代不同而倒有極多的不同点。這些印象涉及多方面，可簡單概括起來，就算是「新羅和百濟的石和山城」，「中国江南地方的城牆和水」，「中国山東，山西的土文化」，以及「高句麗的石和山城」。

對都城風景的這種共同点和不同点如何反映在具体都城的規模和形態上？又東亜の都城，按照地方和時代的差異，各有如何時点？考察以上幾点就是筆者動筆的目的。

做為方法論，以目前可判明平面図の大約一百個東亜都城遺跡（商代以后明清代的中国，高句麗，百濟，新羅和日本）為對象而用自動面積儀測量這些都城的面積，城牆的長度和宮城的面積等，而且以這些測量值為基礎核算出都城和宮城的「整形度」又採用了全体的形態，南北・東西的長度比率，都城和宮城的方位等以供資料之用的。

現段階，未能夠定下完整的結論，但經多方研究后判明的大致可歸納為如下幾点。

- ・東亜の都城，在規模上存在着等級之別，大致可分為五等級。
- ・大帝國的首都規模均是龐大的。
- ・在春秋戰國等時代，規模上存在着大小多種的，但到了隋唐以后倒兩極分別為規模大的規模小的。
- ・日本和新羅の都城，和国力比較起來，規模倒格外大些。
- ・藤原京和平城京の源流必須暫且区分和考察才是好。
- ・都城面積和宮城面積均是互相關聯的，但隋唐代和宋代倒是相反的。
- ・從整体看，重視南北軸，而規模越大越齊整的都城越明顯地具有其傾向。
- ・說起南北和東西的長度，南北要長的都城多，符号南北軸優越性。
- ・不過，都城和宮城，就這一点倒有相反的原理。
- ・東亜の都城，從整体看來，原則上志向於正方形的形態。
- ・不過，都城和宮城，就這一点也同樣具有相反的原理。
- ・高句麗・百濟の都城之中，因利用山河而構成非整形的也存有。
- ・東亜の都城明顯存在着兩種型式。
- ・其中，周礼型都市是規模小而時代越晚越顯著地現出來。
- ・不過，可想像主要是到了元代以后，以周礼型都市為基礎可能會出現了這兩種型式的折中型式。

Key Words : Eastern Asia, remains of capital city, size of capital city, form of capital city, direction of capital city.